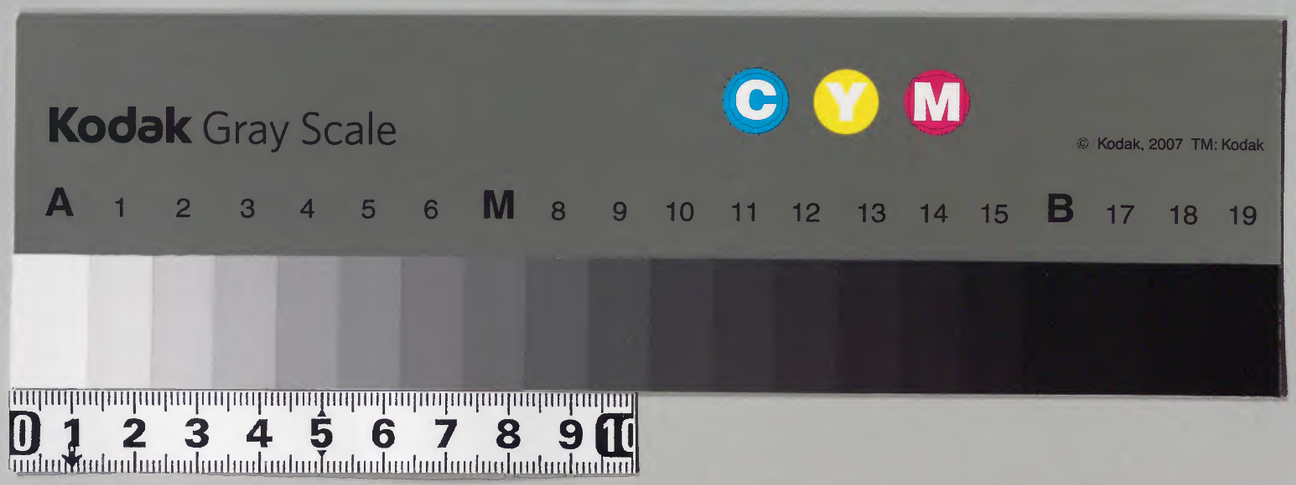
国立公文書館
National Archives of Japan



内閣文庫
番號 和 27852
冊數 5 (5)
函號 177 1043

大岡藏

国立公文書館
National Archives of Japan

御嶽山紀行巻之

石山紀行

獨笑菴立義編

一石山とは倉澤山とも山神の山なり山神の祠あり小祠なり本年檜の巨木四尺廻りなるかあり漸ありて倉澤年を経

明治十五年購求

倉澤川橋あり此川岩崖の小の方山谷より流れ日原川に落合小澤より三里余を小中大六間にして倉澤の窟邪あり

倉澤猪現と称す倉澤村居

より東北の谷へ行事四五町ばかり事
ゝら沢川とゝゝ事曲折して
四五度倉沢谷川紙行と九木はし
武三ヶ所ありて丈夫渡事難渋へ
若し雙て小の方へ武町行若間の
澄沼と行事巖窟の場所へ行ゝ
窟の口倉澤谷川ゝ事百間程も
上ゝり洞口高さ武丈余廣さ武間四方
向て右の方に窟ありて段行者の窟ゝ云

入口小向ひ事巾七尺程中い六尺程五六間
行事下い切岸行如ゝ事なる所也丈ゝ
戻事て右ゝの窟也
中宮新宮の窟口い高ゝゝ入口西小向
いて高さ七尺巾六尺程ゝ入て丈ゝ左
の方新宮の窟ゝ云廣さ武間程の所も
ありて又い巾三尺程の所も有程九六町
いて第ゝ事高所ゝ廣さ三方
金ゝ程底の深さ竹程ゝ程ゝ湯ゝ出る

丈より元の入口迄戻り又右の方へ行成
本宮の窟にて大日の像あり又方
の方成むらの谷を深さ八間程ありて
人の暮しなる所を過り元の入口へ戻る
此て倉潘の窟い廣く四も平地多く入
口一日原の窟いせもく四も雖而なるし
世屬と出る日原川を渡る橋なるべし
中七日 日原の本道を出る
倉潘を社家弐人あり 坂本伊豫 坂本和泉と云

日原の社人倉潘の支配下の在家なり
りい山をもちもはつあるく稼ぎ大江山
はしの家を入て又熊野川海苔あり
買て立出る 西谷 氷川村 西谷
西中迄 河利 右私江戸都も参詣
ちなるよう成者 氷川より白丸村
二十八町 上り下り遠も知れ
ぬ程 つい世の山の形 高く
聳 漸少しなきなる 概買なる家を入て

今度の御公儀より
もやく帰らせなされ
なされ出し為中の山
立番仕なられ
ひらき御つ
町より
立番御付
ひらかれ
秋乃月
なりぬいつて
貢取まい御
これなし
ゆいは
言葉
色し
出しか
ゆえ
ゆえ

家かの立山
茶屋業の火
昔れ乃也
れも
産物
屋敷
戸
綿
物語
行
河
村人御
棚
棚
村
商人
綿
村
家
家
家
家

五中ノ欠、うちハ棚澤ニ立ル
ものゝ[illegible]ぶし一しゃくもあるこうし
いっすんとたらぬ[illegible]ん方なく
行年ハ[illegible]今貫代わりにせ[illegible]色し
食事いなくともくらしかたよろしい
うえ先中ハ[illegible]只ひるの和せさ家
にて[illegible]ノ物もむりくいにくいにくいせ
きないはいと云ハ[illegible]ひらけ
茶鞋ぬきて足わらいい[illegible]事

楚宋ノ[illegible]長額ハいつもの
[illegible]来ルものゝ[illegible]ハ[illegible]
たまゝ色し家ノ風呂ハ[illegible]
清子ノ湯ニ[illegible]足ハ[illegible]
色しゝたらいもの竹簀ノ[illegible]
足ハなくぎ[illegible]ハ湯ハ[illegible]
風邪引色さ四地ハ[illegible]仕事
焚火ハ[illegible]山里なれハ薪ハ[illegible]
ハ[illegible]ものに

海水ニ衣類乾居ル刀負ハ仮ガキ
菜ノ物朔ハ　なし　ハ　ハ　ハ　ハ
ちつまわるうの者なり　ハ　ハ　ハ
炉ニ手　朋　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
山ハ　麻のなさ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

なきぬ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　物なし
今一ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
居ル　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
し　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

すき又は農業の妨となり不毛の地多し田畑
ふりのこしなり畑も平地なるは少し山
きくなるに山の所ありの所
石垣なるは遠り又は新に拓の
中にて中〳〵貴し出る程に石多く
山にも川にもありて石垣に成安し
此辺右川流の者武い炭と焼又は木伐代
伐るなりて下に中多く賃銭を多く
専らこれを板木良材なるこれを

若木なり上の方田原に大木多く出
山の中なれば中〳〵出しかたし
若石多き所流に出る中に小銭乱い常に
伐う事かなり代出しなる本成川端
沙汰に事多く山端成沙汰なる
今年も多く代と積置と一疫大
に付疫病にて見れい左方つゝ亡
木悪くなりし出る一年も
なしなりけるい上總の俗やうなん

代出しなる元方大石利を失い仕しと云
ひ多村内乃中なる岡紀と号し合中
出来ぬ所い荒子芋汁堅て出と今八月の
末にて江戸い荒子もすくなく小川色より
こなるい荒子共鹽てなり合中と多く
山葵多成貴しなれいち色い堂石産て
川向上海浦村ち田かにいと所取り
出に堂所流れ多て右場取て作り
西清流水なりてい生堂市と云いと多

きろ足千向上乃方に流堂て玉川
落合なり金沢の流れよ足しと出い
古多川うち山路四里程奥より出る流
いくはろ乃水も流れなりと云い
財ぼろれ堂いて一同入て江戸と
畳敷長ち玉ふて竹乃茅葺れ
いとしてて育乃麻仕事きろ用て
産も中らて有り百たての姫と多有り
かなて敷も云ぬ心も出らぬ新田流れい

心落居ぬ郡内の者いかゝ思ひて出しきの
こゝろうしろめたく思ひし須山者共さき
からこゝに出て来るを見て
涙を枝引とせなるまゝ鹿のもゝて来り
ゝれるを見つゝ思ひからに考へかくて庵を
見出し原の野さいの内をうろ〻深山なれい
かくもわるゝ〻〻汐和裏道ゝい出し法華の
端なり白浪の恵〻なるれいと庵のもせて
ふをなるらん貴ゝ田舎の乳汁無さ事

うを出にても思られ目をうて外面へ入て
ふ〻なれいと心安からぬて眠られに
御ゝて御ゝをまゝ病し病ひて見るよ
ゝも夜深かいをまゝ起出
るらゝ〻年相の新ゝ切ゝ考て思つもゞさ
奏て食事とすし浅ゝ立出て
色ゝ青柳まゝて道ゝを考ゝ〻なれい
事なり雲ゝ首鳥芋と考ゝ作ゝ食料
こゝなゝを考ゝ〻漆の本考ゝうゝしゝ若

腰ヲ桶ヲけてうるし屋ヲ
青梅街道ヲ西上りに体ヲ蕎麦屋ヲ
入て宣合ヲ見ル明村ヲ行く上小ノ
合口一見ヲ為し うちい行れヲ
うぐ問いを云青梅ノ入口ヲ右の茶代
和ケ瀬わかれて おりを為し見ヲ
明村を九丁里ヲ行て云ノ事上小一見
して行れノ村い沼ヲ為き眺ヲ
ヲ四い上小一見ヲ百て江戸ノ方い帰ラセ

たまヲまこ事ノ猫石ヲ見ヲ
瀧沼ヲ西ヲ沼石ヲ見い八ヲ
ヲ日光山ノ往来の道なりノ
金石ヲうちを云たヲ少しヲ
ヲしもい沼れ明ヲい江戸い入れい
沼ヲ為沼ヲ為ヲ定ノヲ沼彫ヲ
茶碗入ノ所ノ見沼ヲれい青石ヲ
貴石ヲやヲ四いれない市ノ日地蔵
ヲ持来ノ所ノ沼ノ上ヲ

こなたにはくい仆時出来ものくい
出来ものくい高野山より給る毒にて
薬屋と出川

此竜川紙道にも多し文四年中
道與准后のうちの話に勝折の宿
にくいつもと出る物と南ふうきて
欲わりを出つもと出るくい此業流入
ものやにて家出と書かなり出
武義所話に無しなり出来出らの

宇い川紙の紀行中あしを出る
なれい器を
ものを宿の入口より右の方細ちに入る
出より羽村まで往是なるねいうち初り
安うらに人中遠ふ毎よなり杯わるいい
きくれ人家あれいを所よりそり杯
武い郡ちもなりて立廻りなるなし
青梅より三里と半に村を出く見田
大たいおりく此二村千ゝ紙村の
羽村の門話小名多し
なり出る村よりの

御用村より御上水に用村の口より
引き来たり西へいよいよ深く流れて
御上水の口より一筋に堀にして
玉川中九番町まで堀ひろめ
九本に分て柱を建て板多連様に
横へ渡すを叩と云て川水流れ
川水悪く一ノ水門より流れ入る故堀
川中底へ小底砂利ばかりにて巌石多く
水勢はやく流れ波たつ故一ノ水門ハ

ふかく川水をせき入る也
水勢をけし森安に川ノ小堀なる
ゆえ堀ノ底に小底砂
武蔵野樋管ノ図ハ向上の方ハ筏ハ
通て堀ノ底ハ和ノ通る
に今見る所ハ川一面に堀ノ
是なり
一ノ水門中七尺ハ長六間巾五方ノ堀
地形ハ石成入れ間も大石多く つる事

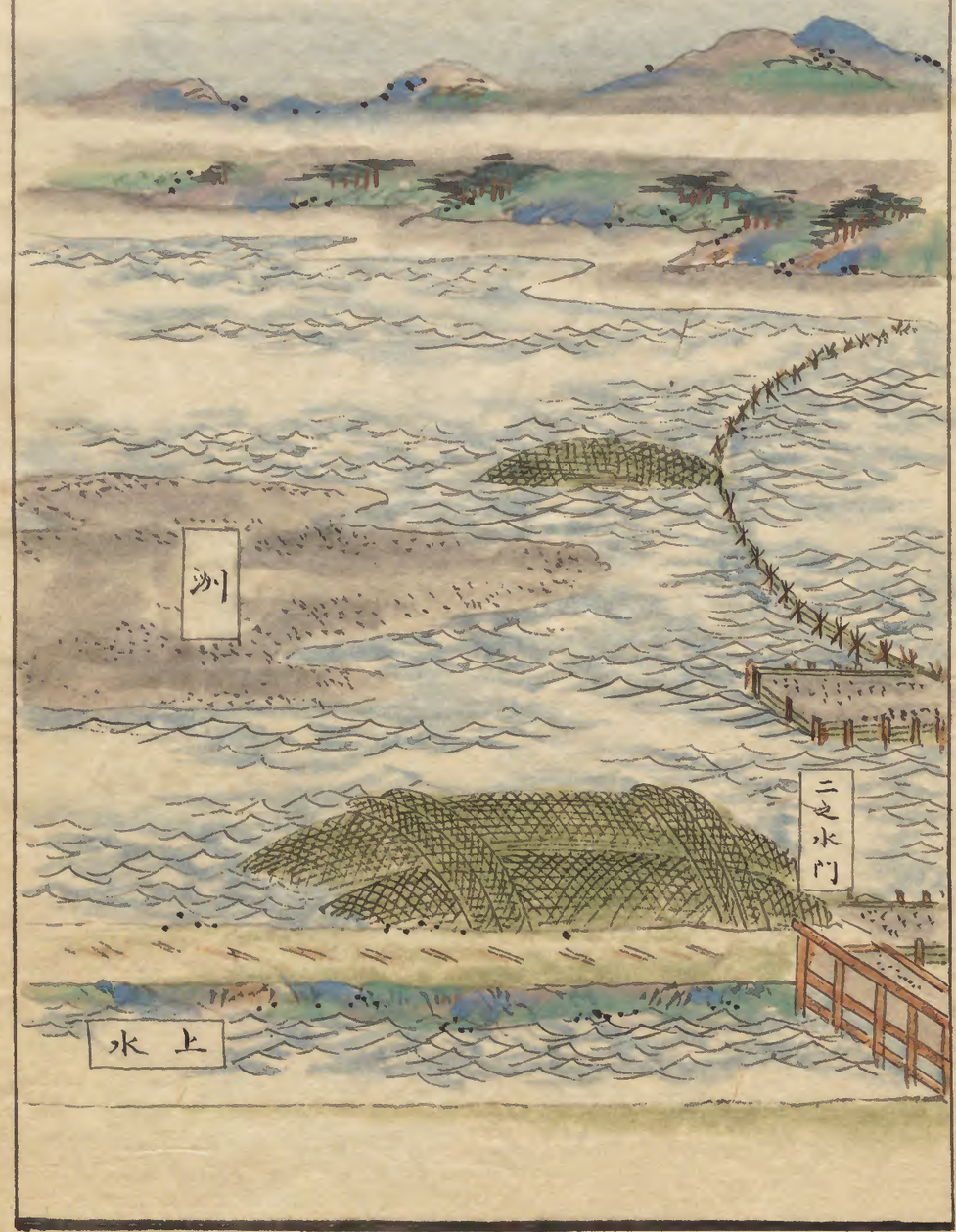
重しゝ堰ゝ堰小二ノ小門ゝ流れ下る
右ノ方に一の小門ゝ二ノ小門ゝの間ゝ
余る小川ゝ出る
二ノ小門巾六尺長六間程
番人小屋ゝ長さ八尺巾壱尺高さ
壱寸程ノ板葺屋根有
裏ゝ玉川堀上水ノ小門差板四十枚之間
二落シ有
是ハ小下ゝ普請ゝ成る節

小堰ゝ加減ゝ成る時小門ゝ
少板減シて増減ゝ成る
也

小神ノ宮ゝ村ゝ成て役人ノ家
有

上水記ニ曰 玉石堀之別著述ゝ
明村ゝ江戸ゝ道法十二里ゝ
上水ゝ右岸ゝ沿小城下ゝ
對シテノ右ゝ成る也 玉川山源

羽村上水口之圖



甲斐國一ノ瀬より羽村まで
武拾里羽村より六ヶ川まで川丈
凡拾六里ニ成 慶長元年まで
御城下上水道ニ成候ハ
ゝ乃渕ハ小滝池なる小ハ汲
樋にて往を永不負申ハ
上水ニ成ハ
神尾備前ハ
清右衛門ハ

武州羽村より四谷ハ玉川ハ
小滝ハ
相考絵図ハ
御発中河紀豊後ハ
寺社
神尾備前ハ石谷将監牧野織部八木
勘十郎 御勘定ハ
花人伊奈半左衛門 伊丹
兄分にて牧野織部八木勘十郎伊奈半十郎

上小道を廣右衛門清蔵屋敷として
見る海同年十二月末日結定取申す事
上小芝堀普請出来人夫渡置己年
四月写より堀はしの同年十一月
末日まで写谷大本戸を堀らせ
玉川より小佐を堀して
羽村の大川まで堀佐三小佐を取
安常写谷大本戸南へ小口を取る
支り虎門を取堀立十分の水

来り支後遠く分水有て諸方上小と
分水別帳より分り
見へ
又云一説に松平伊豆守乃佐来り考る
取分り見出る所火留分小口い
指別乃通制にて云説に伊豆殿堀
云伊豆守乃佐安松令右衛門工夫して
主人へ中立所火留上小出来云
安松令右衛所火留目小代乃事

一件川筋之記申候ハ、なれい器と
又云吾妻日記と云書ハ兼盛四年
江戸より西浦路山ハ見武蔵の
石和より北ハ流ル山城江戸引
渡して百姓ハ渇死ス百姓ハ渇死ス
拘命ハ山城国ハ若干
乃田畑をついやし年月を経て今年
中成就して長流城下ハ来ル
右之文面之趣心なり山流ハ
今東流なり又山を崩し岩城
撃若干乃田畑と貴と云ふい
ろのこと堂と山と
乃川乃ハ同乃こと云ふも山と
いを堂乃ハ又若干乃田畑と貴と
云ふ足ハ田畑と山乃通路ハ路
なり石ハ乃ハ山と引く田の
用水となり乃村農業乃
助ハ小路ハ堀なり石と合考し

手枝先ヶ谷　玉川上水明村
一ヶ小門より江戸迄路十三里より
ありて小路いろ〳〵屈曲して、
二十七里迄より幾いかて
見るよりかたちなり人ヶ住来
らいはいりて屈曲ありて小路いろ〳〵
堀割て居曲ありい人ヶ住来り
余程ちがいし　まて少ヶ
百姓一見ありは

右ハ上水ヶ中ほどより　ありし
ありて中長ありい器ヶ
ありて支ヶ上水ヶ付て下ヶ方ヶ江西
ヶ方ヶ書ヶちがし　是非洋ヶ書ヶ
ありて　いかて農夫ヶ洋ヶ方ヶ同い洋
道いかはなりなりなり江戸　ヶ方ヶ
今百いかはしなに一宿ヶ方ヶ少ヶ
ヶ方ヶ江戸　帰ヶ洋ヶ洋ヶ道　ヶ方ヶ
ありまて利益なき沙汰なりと田舎人

の不貴ないふ様なれども
実しやうの和尚なりしに去年つゝて
やはり牛込辺に出くなりしと云わるの
家よりたのうまれいけこもてもうせ
色し様子色うりかし先年牛頭
辺弘よ洞中菴と云蕎麦屋ありしい
ふもたやすくうじ色しに教ふ大よ力成
法事幸うして牛頭の橋上にかゝるうち
うう蕎麦屋上云ふ日い書うしかるい

江戸善光寺関帳に詰て なるこて留事
なう妻と子供しうの者に居うり江戸へ
帰る者なるう行業しなしい一宿教き
うし迷いわるしう女房随らうり」し
共為帰ようたれさせなるいはうしてあら
ゝ色き拘なし云云是教きて上る
今日も供うの為よ衣類ゆしう大答
うトなるか火事く火伴に入て乾き先
ゝ様成春うゝ色し今に仮なきて事

色〻と貴物乃ゝ出を大さ大
きなる盛り味い人紙に成し
行よ江戸より帰り来るよ世源ら
結〻とるしも迫き頃まて江戸今川橋
住て行ふ火災よりとて出
引移りいきろふ江戸へ参り只今帰り
年中はいくなしも高い物世ろ
江戸へ出ると云ふ人なれ共世相
より〻ひ取ふ花嫁来りる事家内

立出〻足るとろ打ら立出ル嬉い場
面て先はわり与浜桃行方ろ
行ふより馬ニ足ハ荷物沢事ろ
世橋乃わるさよ少〻いとまらし食事世
麻なるろ行ふ〻よ世わるの事弱れ
よ〻も出ら江世代福生乃牛濱と云
牛濱乃年村い玉川
玉川へ金程隔り
武蔵所話ふ云太平記ハ小手秀ろ

坂東道四十六里ヨリ五ツ目ノ宿ニ
牛渕ヨリ西ニ当ル地ヨリ流レ出ル
小手差沢ノ入間郡小野村誓願寺
橋ヲ経テ入間川ヨリ流レ
里数ヨリ沢ヲ向ヘ岸ヲ登リシテ
原風ノ立ツ所ニ
玉川ヲ渡リテ川ヲ向ヒ二ノ宮ヨ
リ西ニ地ヲ岸ヲ原風ノ立ツ
所ヲ今ノ牛渕ト申ス

川ヲ渡リテ石渕ヨリ牛渕ヨリ北ヘ
ヨリ牛渕ノ原ヲ過シ 所入國
ノ後福生村越川村ノ百姓ヲ地代
同意シテ線布ヲ西ヘ北側ヨリ則
福生ノ牛渕右側ヨリ越川ノ牛渕ヲ
又豊海郡石渕千葉沼帝流利ノ石城
ヲ経テ今泉寺境内ヨリ沼帝流利ノ
墓ヨリ千葉ヨリ云又福海常陸沼帝
粧塚ヨリ石城ヲ経ヘ其沼ノ

なるを已て孫舎人双紙に載る石淵も
沙地也泥なを已て（坂東道四十六里なれども小笠原四里なれども直一）
新安手簡に云太平記二十巻武蔵野
合戦後人々紀角論死地理不審の事
なるに尊氏小手差に成て官軍と
合戦を氏敗北新田義宗に逐て
坂東道軍六里尊氏石淵と安房守
追従の兵卒合戦引返し川中にて
戦死せしなるべし向の岸に

義宗つゝ味方なく日既に
西に傾くよ成り向の岡淋しき夫れは
向ふの岸に侍風と立なるべき切
岸なれば引返し小手差に成
有り今小野西小手差の所
浅草石淵（今の伝馬場なり）まで拍里里
有る已し坂東道にして八十里の
間に支度人馬の悪敷やうなれば
遅い行者の為に疲れ

第二又小手差来まて引返され注来
二十里ハ及い人力ないかしい
国大隈ハい尊氏録今ハ云て武州
待野川へ出ると四里ハ太平記い渋
川て待野川い今の神奈川也義宗
小手差来ると神奈川へ出るれ
中間西武義野にて合戦ハ
なるべし　下器

白石先生ハ合戦の中あく論ぜれ

ばれ中長ないハ略
牛淵貴ハ石淵と出るハ太平記
云ハ乃里数ハ又地勢ものゝ但し
牛淵先い石淵と云ると出るい武義
野話ハ人の考ハいけられ土人の
説なるハ物ハ載なる石淵と云い
蓋し今の隅田川なる地図
石淵也と出るい太平記ハつさて帰り
乃者ハ出ハも知るべしられ白石先生の

考ノ説ニ国大臣貴族ニシテ大平記
湯ノ谷ノ論ナリ二又尾城
童忠ノ討死ナリ和ト出ル所ノ因果
論ナリ何ニモ今ハ定カカタシ
世代古ク石濱ノ説ニ證アレハ
信シカタシ
後ノ考ニ今ハ西海ノ色ヨリ砂川ヲ
幸里上ル所ノ新砂川ニテ上小平ヲ
色ヨリ上小ノ端ニ沿ヒ貫井迄ヨリ橋

ヲ渡シテ西ヨリ小金井橋ノ東ヲ柏原ノ
西ヨリ食平ヲ色ヨリ乙ヒ
往果シテ紀行ニ所ノ名ヲ
西ニシテ長新田ヲ渡ル所ニ
ヨリ和田村ヨリ堀ノ内ノ
ヲ過ヌ十色里道ノ
渡ヲ渡リ西ニ須賀ヨリ帰ル

御嶽山
一石山 紀行巻人 大尾

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan